

老子と『道德経』及び「環境問題」の解決 ()

『道德経』の概要

耿

順

一 『道德経』という書物

今日まで遺されている中国春秋戦国時代(約紀元前 770 年~221 年頃)の古典には、その書名として、著者の姓に「子」を付けて、即ち『何々子』と呼ばれるものが多い。例えば、『管子』や『孟子』などはそうである。勿論、老子の著書に対しても『老子』と呼んでいることがある。けれども、この『老子』、即ち同一の書物に対して、また『(老子)五千言』乃至『道德経』、『道德真経』などと呼ぶこともある。また、この特色を有するのは『老子』の他に、『列子』は『冲虚真経』、『文子』は『通玄真経』、『莊子』は『南華真経』と呼ばれることがある。このこと、即ち『何々経』或いは『何々真経』と呼ばれることは、後に誕生した「道教」によるものであると思われるが、それにしても同時期において他の諸子及び学派が老子及び道家に比べて有していない特色である。この特色を言い換えれば、即ち道家と呼ばれる諸子(著書)にある特別な「力」であると言える。なお、特に老子の著書については、唐代皇帝である唐玄宗(李隆基)が『道德経注』と『道德真経疏』を著し、宋代皇帝である宋徽宗(趙佶)が『道德真経解』を著し、明代皇帝である太祖(朱元璋)が『道德真経注』を著し、清代皇帝である世組(アイシンギョロ・福臨)が『道德経注』を著したこと

がある。これらの所謂『御注道德経』の出現などから見て、老子という人物から見ても『老子』という書物から見ても、それが中国歴史において果たしてきた役割は遙かに他の人物又は書物を超えていると言える。

ところが、この状況のもとに、本文は著者と著書を同時に示す『老子』、所謂宗教的に思われる『道德真経』及び政治や社会の側面から見ることでなく、今日の出版物のように書物のタイトル(書名)から何らかのその内容を窺うことができるようになるため、『道德経』という書名を使うことにする。

また、『道德経』という書物は、今日までおよそ 2500 年に渡って伝えられてきたものであって、現在その原文(本来の文章の構成や内容)が解らないのである。今日見られるその本文が数十種あり、注などが付けられているものが少なくとも数千種あるのである。これらをおおざっぱに整理すれば、次の状況である。

まず、本文の版本から見れば、次の三種がある。その一は、約 2200 年前の漢代から今日までに通常の研究家などの間で広く伝えられてきた所謂「通行本」である。この「通行本」は、その種類として沢山あり、内容において大同小異である。よく伝えられているのは、『道藏』に編集されている

『道德真經古本篇』(約 6600 字)や『道德經』(約 5500 字)などがある。その二は、1973 年湖南省長沙市馬王堆漢墓から発掘され、「甲本」(「」によって(章が)別れている。)と「乙本」(「徳」と「道」に別れている。)と呼ばれる二種類の『帛本老子』である。この二種の『帛本老子』の字数(約 5600 字)と内容は大体同じであり、なお「通行本」とほぼ同じである。その三は、1993 年湖北省荊門郭店楚墓から発掘され、「甲」・「乙」・「丙」と呼ばれる三篇の『簡本老子』である。この『簡本老子』の「甲」は約 1200 字であり、「乙」は約 450 字であり、「丙」は約 270 字である。なお、三篇の内容がそれぞれ違い、それらの字数を加えても 2000 字に満たないけれども、「通行本」と『帛本老子』に見られない内容が含まれている。また、この『簡本老子』は、一部の研究者に今日見られるものの中で一番古いとされているのである。

次ぎ、注が付けられている所謂「注本」であるが、これは、一番古いと言われている戦国時代の韓非子が著した『解老喻老』の紀元前 300 年位前から今日まで約 2300 年の間における各種の専門的な著書を数えれば、それは少なくとも数千種あると言える。例えば、古くから伝えられてきた有名なものとして、約 2150 年前に河上公が注を付けた『老子道德經河上公章句』、約 2050 年前に嚴遵が解説などを加えた『老子指歸』、約 1950 年前に道教の始祖であると言われている張陵が注を付けた『老子想爾注』、約 1750 年前に王弼が注を付けた『老子道德經注』等々がある。また、これらは、その「注」の内容がそれぞれ違うのは勿論のことであるけれども、その原文としての構成も多種あり、内容における違いも多くある。

今日、以上の状況に基づき、それに関係する研究は「通行本」と『帛本老子』と『簡本老子』を対照的に合わせて所謂老子の真意或いは『道德經』の原意を追究して進められている。これにより、筆者は、その能力として及ばないところが多々あるけれども、今日の「環境問題」を解決する側面から見て、自分なりの理解により、これらのバージョンの内容を比較検討して主な内容や意味を検討してみることにする。

二 『道德經』の主要内容

『道德經』は、その原文(最初の文章の構成や内容)が判らないけれども、今日までの研究概況から見れば、その概要(重要と思われる文献や多数の文献)を見て二編によって構成されていると見ることができる。例えば、歴史的に見て、『史記』には「老子は五千字余の上下二篇による“道德”を内容とする書を著して離れ去った(老子迺著書上下篇言道德之意五千余言而去)」との記録があり、なお漢代の古墓から発掘された『帛本老子』における「乙本」には「徳」と「道」に分かれている標識がある。それから、概念の使用から見て、「道」という字は 80 回近く「徳」という字は 40 回以上使われている。この状況から見れば、5000 字余りの文章にこれほど使用されている「道」と「徳」は概念として重要ではないとは思えない。けれども、これらの状況により、『道德經』は、その文章の構成として元々「道」と「徳」の二編に分かれていると思うことではないが、最も基本的な概念として老子の思想の精髓であると思われる。こう思うと、『道德經』は、その主要内容として「道」と「徳」に関する論著であるとのことが解る。

なお、やや具体的な内容としては、古今の研究者による解釈などが挙げきれない

ほどあるけれども、その中に章を分けて解釈を加える研究文献があり、なお章の分け方として主に三種がある。即ち、その一は単なる序列番号を加え、その二はその章原文最初の数文字か又はその中の重要概念を使って章の題名にされ、その三は著者の理解によって要約された概念による章の題名にされるとのことである。ここでは、章が分かれているけれども、単なる序列番号の方は別に、原文のその章の概念使用と要約概念使用のものを引用して『道徳経』全体の概要を示すことにする。

まずは、原文のその章の概念使用の例である。これは、既に触れた約 1300 年前に唐代皇帝である唐玄宗が著した『道徳真経疎』における 81 章の題名を取ってみる。また、これはほぼその章の冒頭にある語句を取り、章を分けると同時に 10 巻に分けているのである(ここでは紙面を省くため、章の序列を変えずにその番号を略す)。

巻の一：「道と道(い)い得る」章、「天下、皆知る」章、「賢を尚(たつと)ばぬ」章、「道(どう)沖(ちゅう)」章、「天地、仁(いつく)しまぬ」章、「谷神死なぬ」章、「天長地久」章、「上善水の若(ごと)し」章、「持して盈(み)たす」章、「營魄に載せる」章。

巻の二：「三十の輻」章、「五色」章、「寵辱」章、「観て見ぬ」章、「古善(よ)く土を為す」章、「虚極に至る」章、「太上、下知る」章、「大道廢(すた)る」章。

巻の三：「聖を絶つ」章、「絶学無憂」章、「孔徳の容」章、「曲がると全(まっとう)する」章、「希に言うのは自然なり」章、「跂(き)する者立たぬ」章、「物有り混成する」章、「重軽の根と為る」章。

巻の四：「善行、轍迹無し」章、「其の雄(おう)を知る」章、「將に天下取ろうと欲す」章、「道を以って人主を佐(たす)く」章、

「夫れ佳き兵」章、「道、常に名無し」章、「人を知る者」章、「大道泛(はん)たる兮(けい)」章。

巻の五：「大象を執る」章、「將に歎(ち)もうと欲す」章、「道、常に為さぬ」章、「上徳、徳を為さぬ」章、「昔一を得る者」章、「反す者、道の動なり」章。

巻の六：「上士、道を聞く」章、「道一を生ず」章、「天下の至柔」章、「名と身、孰(どちら)親しか」章、「大成、缺の若し」章、「天下、道有る」章、「戸を出ぬ」章、「学を為せば日(ひび)に益す」章。

巻の七：「聖人、常心無し」章、「出生入死」章、「道が生ず」章、「天下、始が有る」章、「我を介然として」章、「善く建つ」章、「徳を含む」章、「知る者言わぬ」章。

巻の八：「正を以て国を治む」章、「其の政(まつりごと)が悶々たる」章、「治人事天」章、「大国を治む」章、「大国とは下流なり」章、「道とは万物の奥なり」章、「無為を為す」章、「其の安(やす)らぎは持ち易し」章。

巻の九：「古善く道を為す者」章、「江海」章、「天下、皆謂う」章、「善く土を為す者」章、「用兵に言う」章、「吾が言は甚だ知り易し」章、「知らぬことを知るのは上なり」章、「民威を畏れぬ」章、「敢えて勇(いさ)む」章。

巻の十：「民(たみ)常に畏れぬ」章、「人、飢える」章、「人、生きる」章、「天道」章、「天下、柔弱なり」章、「大怨を和す」章、「小国寡民」章、「信言、美(うま)くなし」章。

次ぎは、著者要約概念使用の例である。既に触れた 2100 年前の『老子道徳経河上公章句』に付けられている 81 章の題名である(その章の序列を変えずに番号を略す)。

体道、養身、安民、無源、虚用、成象、
韜光、易性、運夷、能為、無用、檢欲、厭
恥、贊玄、顯德、歸根、淳風、俗薄、還
淳、異俗、虚心、益謙、虚無、苦恩、象
元、重德、巧用、反素朴、無為、儉武、偃
武、聖德、辨德、任成、仁德、微明、為
政、論德、法本、去用、同異、道化、偏
用、立戒、洪德、儉欲、鑒遠、忘知、任
德、貴生、養德、歸元、益証、修觀、玄
符、玄德、淳風、順化、守道、居位、謙
德、為道、恩始、守微、淳德、後己、三
宝、配天、玄用、知難、知病、愛己、任
為、制惑、貪損、戒強、天道、任信、任
契、独立、顯質。

さらに、同じく既に触れた嚴遵が著した『老子指歸』には、この書物の特色をまとめて説明する一節がある。その内容は、次の通りである。

莊子(嚴遵)が言う。昔の老子の『作』は変化を由とし道徳を母とし、効経を首に列し天地を象とする。その上経は天に配し下経は地に配する。陰道は八であって陽道は九である。陰を以て陽を行い、故に七十二首ある。陽を以て陰を行い、故に上下に分ける。五を以て八を行い、故に上経は四十から更始する。四を以て八を行い、故に下経は三十二に終わる。陽道は奇であり陰道は偶である。故に上経が先にあり下経が後にある。陽道が大きく陰道が小さく、故に上経は衆であって下経は寡である。陽道が左にあって陰道が右にあり、故に上経が覆来し下経が覆往し、このように反覆相応して一形と淪(な)る。冥々たる混沌は道がその中であって主である。符を重ね駢

を列すのを以て端緒を見、上経は門であって下経は戸である。知者は其の経を見て効(なら)うと天に通ずる。地の数は陰陽の紀、夫婦の配、父子の親、君臣の儀であって万物の敷である。と。

ところが、まとめてみると、この説明文には内容に関する説明のほか、次の特色があると言える。即ち、その一は『道徳経』ではなくて『作』と呼んでおり、その二は「道」と「徳」によって篇が分かれているのではなくて「上経」と「下経」によって区別されており、その三は「通行本」の「道経」37章と「徳経」44章による81章ではなくて「上経」40章と「下経」32章の72章によって構成されているということである。

なおかつ、以上の三例を通じてその側面から内容を概観することができると思うが、今日の立場に立って筆者なりに概括すれば、次のように理解できると思われる。即ち、『道徳経』は「自然」を母体と法則と為し、「道徳」を物の始終とし、天地人の道を明かし、有無の変化を論じ、無為の価値を語り、剛柔の特性を述べ、嗜欲の害を示し、聖人の徳と小人の論を列し、道による徳と技による失を陳じ、治国と交際の理を語り、養生修身の道を教えるなどを通して把握している真実及び悟った終極的な真理を伝え、人及び人間社会の活動が自然に反せず人間社会の限界を超えて成長する道を示しているという書物である。